

会員の広場



「ルーツ」探求で思う事

千賀 哲郎（名古屋）

英国に駐在した頃の1970年代、アレックス・ヘイリー原作の米映画「Roots」を見た。アフリカのガンビアで一人の黒人少年クンタキンテが奴隷商人に捕まりアメリカに売られる。3代に渡り迫害と辛辣な生活の中、アフリカ人としての誇りを失わず生きる。

そしてリンカーンの登場を経て奴隷解放が実現すると終には弁護士となり、人権の為に働くというストーリーと記憶している。

その後、シカゴへの赴任が決まり、友人とルイジアナ州へ旅した時、プランテーションを巡りをしたことがある。案内役の運転手は、偶然にもその曾祖父がプランテーションの元オーナーだという。映画では奴隷を酷使、残酷な仕打ちをする側の人間であり、興味が俄然高まった。彼の言葉を借りれば、「勝者が都合の良いように歴史を作る。北部の狙いは南部の富にある。南北戦争に勝利すると、北部は南部に過酷な税を課し、その結果プランテーションの維持が困難になった。自分の曾祖父もその一人である。奴隷解放は北部が南

の富を篡奪するための口実に過ぎない」と。米国の南部に今もこの様に不満を抱く人がいることに驚かされた。彼の言うように、歴史は勝者が自分の良いように創作した面は多い。当時の北部は、産業革命の途上にあり保護貿易を訴えていた。そして安い労働力を必要とした。一方南部は安い労働力を使い棉花を欧州に大量に輸出していたので自由貿易を標榜していた。

リンカーンも当初から奴隷解放を主張した訳ではない。彼は南部のケンタッキー州の出身であり、妻の実家も奴隷を抱える家族という背景もあった。しかし彼がその主張を大きく変え奴隷解放に舵を切ったのは、南部が戦費調達の為、欧州に支援を要請したことが契

機になった。彼は欧州に対し、「奴隷を正当化する国に資金供与をするつもりか」と訴え欧州を牽制したのである。その結果南部は敗北し奴隷は解放されたが、黒人に対する蔑視や差別、迫害は北部でも何ら変わらず続いた。

この事から歴史は、一方を見るだけでは十分でないこと。そして多くの場合、善悪より利害によって歴史が動いた。そして真実は現場に行かないと見えないと感じた。この「Roots」に触発されて、私も今年正9年から始まる自分のルーツを本にすべく挑戦している。ルーツの舞台は尾張、そして時は戦国時代である。これまでの歴史の通説を変えるような事象に出会う事を楽しみにしている。